

特別展「多みんぞくニホン」のめざしたものと達成したもの

| | |
|-----|---|
| 著者 | 庄司 博史 |
| 雑誌名 | 国立民族学博物館調査報告 |
| 巻 | 64 |
| ページ | 9-16 |
| 発行年 | 2006-12-28 |
| URL | http://doi.org/10.15021/00001534 |

特別展「多みんぞくニホン」のめざしたものと達成したもの

庄司 博史

1 はじめに

2004年3月末から約70日間、国立民族学博物館（民博）において特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」が開催された。筆者はこの展示の実行委員長として、約20名の展示プロジェクトメンバーとともに、構想から企画、資料の収集、展示の実現にいたるまでかかわってきた。ここでは、この特別展の発案の背景、展示の理念、収集や展示にかかわる手法などについて述べてみたい。

民博は設立されてからまもなく30周年をむかえるが、当初民博は国民が外国やその文化にモノをとおして直接触れることのできる数少ない機関であった。70名をこえる研究者は文化人類学（民族学）のほか、考古学や言語学など専門領域をもちながらほとんどすべて世界のいずれかの国、地域あるいは民族をフィールドの対象としており、その調査・研究の成果を、展示においても公開するというようになっていた。当時、日本人の外への関心はつよく、それは来館者の年間60万人という数にもあらわれていた。民博の研究者の研究の対象はほとんどが外国の他民族であった。これは見方を変えると、文化相対主義をとりながらも、外国の民族や文化の特殊性に言及することで、日本文化の外縁を際立たせ、日本意識の強化に貢献してきたともいえる。

それから30年たった今、日本は大きく変化した。高度成長期からバブル期、そしてその崩壊期をへて、自信にあふれた日本文化特殊論の勢いはよまわり、ようやく日本も特殊な国ではなく、普通の国のひとつであるという認識も広まり始めた。一方で生態環境学や開発援助学など、いままでの自国中心的な考え方から、よりグローバルな視点でさまざまな現象をとらえようとする傾向も一般化した。民博においてもそのような現代的な分野での研究は盛んになりつつあり、フォーラムやシンポジウムなどここ数年開催されてきている。しかし、このような新しい研究の動向が、民博のもう一つの使命である、一般の人びとを対象とした展示に反映されているかという点、十分であると断定することはできない。民博の展示活動は常設展と年に二回の特別展を中心に展開してきたが、基本的に民族や地域の伝統文化にこだわってきた。数年前に始まった常設展の改装にともない、先住民族の主張や芸術活動がようやくオセアニアやアメリカ、アイヌ展示でとりあげられるようになったばかりである。

特別展「多みんぞくニホン」はこのような意味で民博にとっては、現代的な、そしてわたしたちの足もとで進行中の多民族化を正面からとらえようとした点で画期的なここ

ろみであったといえよう。日本に外国からやってきた人びとをとりあげた展示、あるいは国内の多民族性を全面的にとりあげた展示はおそらく日本でもなかったとおもわれる¹⁾。

ここでは、この特別展の着想と目的、企画から製作までをたどることで、日本がこれから向かおうとする多民族社会をいかに展示によってしめそうとしたか簡単にのべることにする。

2 構想のきっかけ

この展示の構想をもったのは5年も前のことになる。以前から北欧の少数民族や言語政策を対象として調査するかたわら、70年代から80年代以降、北欧、特にスウェーデンとフィンランドが移民や難民の増加で多民族化し、それにともない社会や人びとが大きく変わるのをつぶさに見てきた。これらの国はかつてヨーロッパでは民族的に比較的均質な社会といわれていたが、この30年のあいだにスウェーデンは住民の2割近くが外国生まれ、あるいは外国生まれの両親をもつといわれるほどになった。一方のフィンランドも外国籍は3%と少ないものの、10年あまりのあいだに4倍に増加しており、都市部においては一割以上が外国人というところもある。何より注目すべきは、いずれの国も現在、国家として多文化主義を外国人統合の基本理念としてかけ、行政や教育の面で実践していることである。つまり外国人移住者が文化・言語を保持しつつ市民となることを国家として保障するというものである。そのひとつに、子どもたちへの出身言語コミュニティの母語教育の実施がある。しかしこれらの政策も、ここにいたるまでは国家の理念にもおよぶ長年の国民的論争と試行錯誤を経てきての到達点であった。

一方、日本でも現在外国人登録者数は200万人に達し、その割合も1.5%をこえた。いつのまにか、どんなところで外国人にあってもたいして驚かないようになった。また、さまざまな職場や学校に外国人が進出し、外国人への行政の多言語サービス、ボランティアによる外国人への多種の支援活動がみられるようになった。以前にくらべれば、日本社会も日本人も外国人の受容という点では確におおきく変化したことは事実であろう。しかし、入居差別や就職への制限などはのこっており、なによりわれわれの中にある外国人へのよそのもの意識には根強いものがある。

現在、日本では経済界を中心に、おそらく安い労働力確保を視野に入れた外国人労働者導入の構想が注目されているが、それとはかかわりなく、さまざまな形での外国人増加は止むことはないであろう。自由意志による移動を人権としてみとめる先進国を標榜するかぎり外国人の増加をこぼむことのできないのは欧米の例を見ても明らかなことだ。過去10年あまりのあいだに急速に変化した日本ではあるが、さらにこれ以降の多民族化をいかに受け入れることができるであろうか。ひょっとすると、それは今まで以

上に、受け入れ側であるわれわれ自身の根本的な変革を要求するものであるかもしれない。おそらく、それには現行の法制度や行政サービスの対応だけでは十分でない。すくなくとも、ホスト社会で多数派である日本人が、現状の認識のうえにたって、排他的な意識の変革を要求されることは間違いない。

先へのべたように、民博において、このような現在進行中の日本の多民族化やそれについての一定の主張をもって望んだ展示は皆無であった。しかし、世界の民族を国家の大小、「文明度」にかかわらず優劣をつけず平等にあつかおうとする立場を堅持してきた民博にとって、それも国家の研究機関（2004年当時）がこの問題を取りあげることこそ、大きな意義がある。そして、それには今こそもっとも適していると思えたのである²⁾。

3 特展の目的と手法

特展の目的として掲げたのは、来館者に、1) 現在の日本の多民族化の実態をつたえ、認識をたかめることで、2) 今後もおそらく続く多民族化とその際、要求される共生の必要性への自覚をうながすことであった。

日本の多民族化がいかに進んだか、ここで紙幅を費やすことはしないが、日系人の大量「帰国」、密入国、中国帰国者、留学生、就学生など入国の形態はさまざまながら、1980年代の後半から急増した外国人を日本は曲がりなりにも受け入れてきた。この間、多くの摩擦やとまどいを経ながらも、日本人と日本社会は確実に変化してきたが、これがグローバル化という世界の流れと軌を一にしていることはまちがいない。もちろん日本の多民族状態はべつに今に始まったことではない。そしてアイヌや在日コリアンのさまざまな権利をもとめる運動が上で言及した変化の下地になっていることも疑いない。それでもあえて現在の多民族化を重視したのは、単一民族、単一言語国家と信じられてきた日本が今、ようやく外国人の存在を認め、また受容しはじめているのを理解する絶好の機会と考えたのである。人びとの記憶にある十数年前にくらべいかに自分が、そして日本社会が変容してきたか、それを改めてふりかえることで、これからのさらなる多民族化への自覚を促がせるといえる。そして、現時点での在日外国人と彼らを取り巻く状況を移民史の一区切りとして記録し、展示しておくことは重要であると思えたのである³⁾。

展示の手法として重視したのは、できうる限り外国人個人の体験、思いを現物の資料をもってあらわすということであった。抽象的な民族共生の必要性、移民の経験してきた苦労は書物などでもすでにおおく語られてきている。しかし来館者ひとりひとりに自分と同じレベルでそれらに共感し、理解をうながすには、彼らの使ったもの、人生の軌跡をしるす写真や証明書を見、触れるのに勝るものはない。実際の展示では所有者の了

解をとって、文書や写真もできるだけそのままのかたちで展示させてもらった。

もうひとつの方針は、在日外国人の視点に立った展示をすることであった。外国人の日本での生活は差別や貧困、苦労などもっばらネガティブな文脈で語られてきた。これが外国人の暗く受動的なイメージをつくりさらに強化していることも事実である。しかし、展示では、かれらの日本での生きがい、楽しみ、仲間との交流など積極的な側面もすすんでとり入れた。生活の舞台が日本社会にあり、同じ住民としてくらそうとする姿を示すことで、逆にそれに立ちふさがる差別など社会的障害の存在をしめすことができると考えた。

展示の製作面で、今回の多民族展示のおそらく最大の特徴は、展示の企画段階で用いられる資料がまだほとんど手元になかったことにある。在日外国人、特にニューカマーについての展示がかつてなかったことにくわえ、個人が使用し保存してきたモノを展示しようとしたため、直接外国人から収集する必要があった。個人に属するプライベートな情報を含む写真や文書、思い出と愛着の品として守ってきたものである。それらの所在をしり、借用できたのは信頼があつてはじめて可能なものであった。

以上のような理由から今回の展示プロジェクトの約20名のメンバーは、ほとんどが民博以外の、外国人コミュニティ研究や支援にかかわってきた若い研究者や大学院生、NGO活動家によって構成されることになった。もちろんそのメンバーにはコミュニティ出身者もくわわったが、すべてコミュニティに深くかかわる活動を続けてきた人びとである。構想段階から3年以上にわたり、企画から資料収集、展示設計、製作、そして開始後のイベントまで、かれらとかれらを介してサポートしてくれた200近い外国人コミュニティ・メンバーと組織なしには成り立たないものであった。

4 展示の構成と運営

民博の特別展示棟の二層をもちいた展示は、日本の多民族化の歴史とその影響、市民や社会の対応を示す1階と日本の代表的な5つの移民エスニック・コミュニティのコーナーからなる2階で構成した。以下展示の各コーナーの詳細や技術的な面は省き、展示の目的をどのように伝えようとしたか簡単にのべてみたい（各コーナーの配置は国立民族学博物館ホームページの特別展「多みんぞくニホン—在日外国人の暮らし」⁴⁾を参照のこと）。

1階のエントランス正面には数十枚の在日外国人の顔写真を配置した。多くは展示の資料提供やインタビューでかかわってくれた人びとである。アジア系の人びとがほとんどで、そえられたなまえと出身国がないかぎり一見して多くの日本人とあまりかわらない。今、このような外国人が日常われわれのすぐ近くで暮らしている。円形状の1階の巨大な壁面にはその3分の1を占める年表をかかげ、ほぼ100年にわたる日本の出

国入国の移民史を写真、図表とともに追った。日本にも、時には密航をしても海外へ生活の糧をもとめた時期があったこと、今の多くの外国人の存在はかつての日本の海外への殖民、領土拡張政策にもその根をもつこと、そして戦後から現在にいたる外国人の増加とそれにとまなう社会の法制度的対応をしめした。隣接して、いくつかの「島展示」とよんだテーマコーナーをもうけ、日本の多民族化を理解するうえで重要なトピックをとりあげた。入管手続き、差別問題、子どもたちの主張、外国人の労働、日本のイスラムなどについて、当事者の写真やことばによって解説した。

1階ではまた、外国人集住地域、エスニックショップ街、エスニックフェスティバルやエスニック・メディア展示コーナーをもうけ、社会においてその存在感を強めつつある外国人のビジネスや文化活動を紹介した。その一方で、行政における外国人のための多言語情報サービスや相談窓口、NGOのさまざまな外国人支援活動にも焦点をあて、外国人を住民として受けいれようとするうごきをとりあげた。なかでも神戸のNPOが運営する多言語コミュニティ放送のサテライトスタジオでは毎日曜日、民族イベントと連携して移民コミュニティむけの実況放送をおこなった。また、中国帰国者の子どもたちを対象として日本語教育や日本への適応指導をおこなうため小学校に設けられた教室は、「パンダ教室」と命名され、その活動を紹介するとともに、ワークショップの会場としても利用された。

2階のエスニック・コーナーでとりあげたのは中国系、フィリピン人、ブラジル人、ベトナム人、コリアンで、それぞれ今日の多民族社会を構成する特徴的な移民集団である。在日ベトナム人は多くは難民として来日した最大のグループであり、その受け入れ、定住促進に関して日本に他国を参照する機会をあたえ、難民処遇を国際的レベルに引き上げさせ同時に日本も国際社会の一部であることを認識させたといえる。今日日本に生活の根をおろしつつある彼らの姿に注目した。中国コーナーは老華僑、新華僑、中国帰国者出身者がそれぞれの部門を担当したが、食生活など共通点は保持しつつ、日常生活、目標、社会との関係では独自のものをもつことが示された。フィリピン人は、日本の外国人人口としては4位をしめる。戦後いち早く日本へエンタテイナーとして来日したことでしられるが、日本人の配偶者や定住者として滞在する人びとも少なくない。展示では日本各地で日本人との国際結婚から生まれ、育ちつつある子どもたちを取りあげた。一方、ほぼ100年の歴史をもつ在日コリアンは、同じ民族にルーツをもちながらもオールドカマーとニューカマーという2つのグループが形成された。これらは接点を持ちながらも、生活様式や日本社会とのかかわりにおいて異なっている。今日、日本社会になくはならない存在となったコリアンの背景には、戦中戦後来日した一世の人びとの苦労があった。コリアン・コーナーでは、そのコリアン一世の生き方を証明書、写真、生活用具とかたまりによって示そうとした。今日のブラジル人のデカセギはかつての日本の投影である。展示では、ほんの100年から数十年前、ブラジルに出稼ぎでわ

たった人びとの子孫が、日本人という多数派の中で日系ブラジル人としてコミュニティを維持しようとする姿に注目した。

エスニック・コーナーではコミュニティ出身者が多くかかわったこともあり、それぞれの生き方・生きがい、日本社会への姿勢、内部での多様性などが浮かび出るものとなった。一方で、多文化共生という特異な伝統文化への傾倒や文化的差異へのこだわりが強調され、しばしば外や内側からの民族的イメージの画一化、固定化におちいりやすい。外にむかって主張する文化権は、文化本質主義におちいり自らも拘束する危険をもっている。しかし、今回の展示では、むしろ日常の日本人とかわらない生活のなかで、習慣や言語、モノへの愛着は際立たせつつも、力強く柔軟に生きようとする姿を前面に出すよう努めた。ややもすると逆境での苦しさのみが前面に出がちであるが、積極的に日本社会とかかわり、社会的、経済的に成功した人びとにも注目し、コミュニティの次世代へのはげみとすることを重視した。内部でかならずしも意見の一致をみたわけではないが、エスニック・コーナー展示の基調として、コミュニティの人びとがそとにむかってしめしたい側面と「あかるい雰囲気」を重視しようとしたのは、そのためである。

特展は展示のみによってなりたっていたわけではない。特展がはじまるとプロジェクトのメンバーは担当したコーナーでギャラリートークを行い、直接来館者とはなす機会をもうけた。またゲストに呼んだ、差別によって殺された少年の父親の話は多くの来館者の共感をよんだ。1階の「パンダ教室」は、中国からの帰国者に同伴した子どもたちの日本語学習教室として運営されている教室を再現したものであったが、ここでも期間中いく度か外国人の文化やことばについての教室が開催されている。毎週末にはまたさまざまなエスニックイベントが開催された。外国人コミュニティ同好家や民族学校生徒による民族舞踊や楽器演奏は多くの観客をよびよせた。

5 展示をおえて

70日間の展示の間に約3万7000人の入場者を得ることができた。展示期間の短さと「理念先行型」展示にしては予想を上回るものであった。期間中、会場外で開催されたコミュニティ・メンバーによる二十数回のエスニックイベント、講演会参加者や特展解説書読者をくわえるとはるかに多くの人がこの特展に触れたはずだ。当初から目標としていた小中高生の団体も約半数をしめた。なによりうれしかったのは、コミュニティの人びとが多く訪れたことである。今までかえりみられなかった自分たちの資料の価値を知り、自分たちの生活が展示されていることを好意と満足を持ってうけとめてくれた。そしてほとんどが、エスニック・コーナーに前向きで明るい印象をもったようだ。

今回の展示のひとつの特徴は、日本人が身近に生活しながらほとんどその存在すら知

らない外国人の生活を至近距離から触れる体験をうながすことにあった。ことだけが先走りしがちな多文化共生の必要性をまず、かれらを知る事から感じてもらいたかった。展示の期間中回収した数百のアンケートからも、外国人の存在をしった、かれらを身近に感じるようになったという感想が多かったことから、われわれの目的はある程度達成できたとおもう。多文化共生社会の達成が広い国民的合意の上に初めて成立するのなら、そこへの道は短くはない。しかし、曲がりなりにも国家機関が在日外国人に焦点をあてた展示をおこないえたことの意義は小さいものではない。この特展が外の「他者」に向きがちな日本の人類学に多少とも影響をあたえたかどうか定かではない。それでも閉幕後も外国人支援のNGOや教育関係者から、特展の多文化共生教育・事業への利用や巡回展への希望がよせられている。少なくとも社会的には幾ばくかのインパクトをもつものであったといえよう。そして、在日韓国人歴史資料館、華僑歴史資料館、(ブラジル移民の)移民資料館の関係者がかたつように、この特展が移民コミュニティ博物館の実現や活性化にいくばくなりとも貢献したとすれば予想以上の成果であったことになる。

注

- 1) かならずしも少数民族という観点ではないが、大阪の人権博物館(リパティ大阪)は、歴史的に虐げられてきたマイノリティとして、アイヌ、在日コリアン、被差別部落民に焦点をあわせた展示をおこなっている。政治的な圧力のなかで、これらマイノリティのうまれた歴史的な経緯を、資料をもって示すとともに今日も根強い差別や差別意識を告発する常設展示をもうけている。在日外国人自身に関する展示は、しばしば、外国人コミュニティNGOのイベントの一環として、写真パネルや年表などをもちいた小規模のものが開催されるが、多くはその場限りでおわり、資料の体系的な収集や保管はおこなわれていない。しかし最近では外国人コミュニティや団体のなかに、その歴史や活動についての情報や資料、写真を収集、展示しようとする活動が活発化している。神戸の華僑歴史資料館、東京新宿の高麗博物館、そして昨年開館した在日コリアン歴史資料館がある。またブラジル人のあいだにも(「ABC Japan 在日ブラジル人起業家協会」)ブラジルへの移住から今日の来日までを対象として展示する「移民記念館」が群馬県の大泉町と愛知県の小牧市に開設されている。日本が外国へ送り出した移民に関する展示で代表的なものに国際協力事業団の運営する海外移住資料館がある。これはおもにハワイと中南米へ移住した人びとを対象としており、日本の領土拡大と海外侵略の一環として送られた満州、朝鮮半島、太平洋諸島や東南アジアへの移民についての言及はさけている。また神戸にはかつてブラジルなどへ向かう人びとに移住の準備研修をおこなった旧国立神戸移民収容所(後、神戸移住センターと改称)があるが、現在、神戸移住資料室として小規模の資料の展示をおこなっている。
- 2) 現在、民博では、民族資料を展示するだけでなく、実際につくり、体験することで異文化への理解をふかめようとするプログラムが進行中である。しかし、モデルはあくまで民族の伝統的標本資料である。民族の「正しい」伝統文化を固定化し、画一化するという点では、民族、文化の境界をきわだたせる意味で、本質主義をなぞるおそれもある。

- 3) これには、第一に急激な大量の移民の到来期のピークをすぎたとみえた点、第二に日本の外国人政策において、法的、行政の対応が、地方参政権、公務員採用への制限、母語教育実現への問題など残しながらも、かなりの部分まですすんだ点があげられる。さらに、移民資料の収集の急務である。特に在日コリアンではオールドカマーの一世が減少しつつあることから、かれらの資料、体験を記録する必要性はコリアン・コーナー担当者には強く意識されていた。
- 4) <http://www.minpaku.ac.jp/special/200404/>

文 献

庄司博史編

2004 『多みんぞくニホン一在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団。